

# 非鉄金属概況

日本鉱業協会 企画調査部

## 金

### 【海外】

#### 1. 価格推移

9 月相場	高値	安値
ロンドン相場(\$/toz)	: 1,350.90 (8 日)	1,282.55 (27 日)
国内建値(円/g)	: 4,745 (15 日)	4,683 (29 日)
為替相場(円/\$、TTS)	: 109.40 (8 日)	113.95 (28 日)

9 月の海外金相場は 1 日に\$1,318.40/toz(トロイオンス)と\$1,300 台でスタート、北朝鮮を巡る地政学リスクの高まりや米政治の混乱を背景に、上旬にかけても上昇基調で推移、8 日には\$1,350.90 と前年 8 月以来 1 年 1 か月ぶりの高値をつけた。この間、1 日に発表された 8 月の米雇用統計で非農業部門雇用者数の前月比の伸びが市場予想を下回ったことで、ドル安が進んだことも金価格に影響を与えた。また、7 日に欧州中央銀行(ECB)が来年 1 月以降の緩和縮小に向けた議論を始め、ドル安を加速させたことも影響した。

中旬では、11 日の国連安全保障理事会で北朝鮮に対する追加制裁が全会一致で採択され、緊迫ムードがひとまず後退したことから下落基調を辿った。加えて 15 日の米長期金利の上昇により金価格の下げに拍車がかかり、20 日の米連邦公開市場委員会(FOMC)において、量的緩和政策の終結が決定され、さらに 6 月に続く利上げが見送られたことで、21 日には前月末以来の\$1,300 台割れとなった。

月末は、26 日に米朝の対立激化が強く意識され、一時\$1,300 台を回復したが、その後はイエレン米連邦準備理事会(FRB)議長の講演を切っ掛けに、年内の米追加利上げ観測が再び高まったことで反落、29 日には\$1,283.10 と弱含んで越月した。

#### 2. 為替相場推移

9 月の為替相場は 1 日に\$1=111.16 円(TTS 相場、以下同じ)でスタート、4 日には 1 日に発表された 8 月の米雇用統計で非農業部門の雇用者数の増加幅が市場予測を下回り、さらには 3 日の北朝鮮の核実験により地政学的リスクが高まったことから、「安全資産」とされる円買いが進行、8 日には\$1=109.40 円まで円が買われ、前年 11 月以来 9 か月ぶりの円高・ドル安水準となった。

ところが、北朝鮮が 9 日の建国記念日にミサイル発射などの挑発行為に出なかつ

たことによる北朝鮮問題を巡る警戒感がひとまず後退したことと、加えて 11 日の国連安全保障理事会が全会一致で北朝鮮への制裁決議を採択し、軍事衝突への警戒感が和らいだことから、円売りが増加、12 日には\$1=110.53 円、13 日には\$1=111.14 円まで円安・ドル高が進行した。14 日以降も、米長期金利の上昇や欧州株高から円は軟調推移となった。

下旬では、米連邦準備理事会(FRB)が 20 日の連邦公開市場委員会(FOMC)で年内と来年の利上げ見通しを据え置いたことから、さらに円安が進み、21 日には\$1=113.53 円と本年 7 月中旬以来の円安・ドル高水準をつけた。その後、米朝の対立激化によって一時的に円が買われたが、月末では再び年内の米追加利上げ観測の高まりから円が反落し、29 日には 21 日とほぼ同水準の\$1=113.73 円をつけて越月した。

対ユーロでは、上旬では€1=131 円近辺を小高く推移したが、欧州中央銀行(ECB)や英中央銀行の金融引締めへの動きが相次いで現れたことから、下旬にかけて続落し、29 日には€1=134.35 円で越月した。

## 【国内】

### 1. 建値推移

9 月の国内金山元建値は 1 日に 4,698 円/g(グラム)でスタート、上旬から中旬にかけて、海外相場の上昇から概ね 4,700 円台の高値をキープ、15 日には 4,745 円と月間最高値をつけるとともに、2015 年(平成 27 年)6 月以来 2 年 3 か月ぶりの高値をつけた。その後もほぼ 4,700 円台の大台を保っていたが、月末には海外相場の下落から 4,700 円台を割り込み、29 日には 4,683 円をつけて越月した。

### 2. 金地金生産・出荷・生産者在庫(2017 年 8 月分=平成 29 年 8 月分)

生産 : 8,800 kg (前月比 3.8%減、前年比 10.7%減)  
出荷 : 10,141 kg (前月比 15.9%増、前年比 9.2%減)  
在庫 : 5,306 kg (前月比 20.2%減、前年比 11.7%増)

(生産、出荷、在庫の出典は経産省生産動態統計調査)

8 月の生産は 2 か月連続の減、前年同月比も 2 か月ぶりの減。出荷は前月の反動で増加するも、前年同月比では再び減。在庫は前月比減だが、前年同月比では 5 か月連続の増。

## 銅

### 【海外】

2017年9月のLME銅相場は月初に2014年9月以来の高値となる\$6,904/tまで上昇したが、その後反落し、後半は\$6,400圏での推移となった。米国経済の好調持続、中国やユーロ圏の景気回復の兆候など市場心理の改善を背景に高騰局面を辿った銅相場は、9月に入ってドル高やLME在庫の急増を主因に調整局面入りした。

米国経済は米連邦準備制度理事会(FRB)が20日、金融危機開始後の量的緩和策を完全に終結し、4.5兆ドルまで膨らんだ保有資産の縮小を10月から開始することを決定した。26日にはイエレン議長が12月利上げの可能性を示唆した。さらに、28日に発表された第2四半期GDP成長率の確定値は前期比3.1%/年と改定値3.0%から上方修正された。こうした背景下、ドルは対ユーロで月初の\$1.20水準から月末にかけて\$1.17台へとドル高基調を辿った。

中国経済は1~8月の銅輸入が前年同期比12.7%減、1~8月の固定資産投資は1~7月に比べ鈍化、8月の工業生産も2016年12月以来の低水準など投資家心理を失望させる指標が相次いだ。

LME銅在庫は8月初めの300千t水準から9月8日にかけて208千tまで急減したが、11日に一転し19日にかけて314千tまで急増した。LME銅在庫は過去2年間、投機的なロング筋とショート筋による大量の在庫操作の攻防が繰り返されており、今回は9月下旬にいたりようやく沈静化した。

供給障害要因としては、ファーストクオンタムミネラルズは9月14日、カンサンシ銅鉱山製錬所SXEW工場、センチネル銅鉱山(ザンビア)の操業が翌週から正常化する見通しを示した。カンサンシ銅鉱山は定修が終了し、12日から操業を立ち上げた。電力供給問題は不足電力の輸入を国営電力公社ゼスコが認めたことから、電力料金を9¢/kWhに引き上げることに合意した。電力料金は2017年1月に遡及して引き上げられる。

PTフリーポートインドネシアのグラスベルグ銅鉱山地域で9月24日と25日の2日連続で走行中の車両に対する狙撃事件が発生した。24日は給水トラックとパトロールカーなど3台が狙撃され、25日は労働者輸送バス30台とパトカーが狙撃されパトカーの運転手1名が負傷した。このため、ティミカ市と鉱山町タンバガプラを結ぶ道路は24日朝から閉鎖された。

一方、コデルコ(チリ)は9月14日、ラドミロミッチ銅鉱山管理職組合と新労働協約に合意したと発表した。給与は据え置かれるが、解決一時金6.35百万ペソ(\$10,160)が支給される。また、生産性連動インセンティブが導入される。新協約は10月1日から発効し、有効期間は現行協約の24か月から35か月に延長された。

ルンディンマイニングも9月22日、カンデラリア銅鉱山(チリ)労組と新労働協約に

合意したと発表した。現行協約は今年末に期限切れとなり、新協約の有効期限は 3 年間。

また、アサルコ(米)労組は新労働協約を批准した。全米鉄鋼労組(USW)が 9 月 21 日明らかにした。適用対象はシルバーベル、ミッション、レイ銅鉱山、ヘイデン銅溶錬工場、アマリリヨ銅精製工場/ロッドミル工場の労働者約 2 千名で、新協約の有効期限は 2018 年 11 月 30 日。旧労働協約は 2013 年 6 月 30 日に期限切れとなったが、2015 年 6 月 30 日まで延長された。11 月 30 日、アサルコは労組に最終的な労働協約案を一方的に通告したため、労組は全米労働関係委員会(NLRB)に提訴していた。

需給動向については、国際銅研究会によれば、2017 年 1~6 月の世界の銅鉱石生産は前年同期比 2.1%減の 9,663 千t、地金生産は横ばいの 11,575 千t、消費は 2.1%減の 11,650 千t。この結果、地金需給バランスは前年同期の▲405 千tから▲75 千tへと供給不足幅が縮小した。報告在庫は 17.2%増の 1,455 千t、在庫/消費比率は 2.5 週間から 3.0 週間へとやや上昇した。

鉱石生産の内訳は精鉱が 1.7%減少、SXEW は 3.5%減少した。国別にはチリがエスコンディーダ鉱山のストライキとコデルコの生産減少の影響で 9%減少した。カナダとモンゴルは低品位鉱体へのシフトの影響でそれぞれ 22%、21%減少した。インドネシアは 1~4 月の精鉱輸出禁止により 9%減少した。米国は鉱石品位低下と年初の天候障害の影響で 10%減少した。しかしながら、メキシコ、ペルーは鉱山の新設、増強によりそれぞれ 9%、7%増加した。2017 年第 2 四半期の世界生産は前期に比べ増加したが、前年同期比は 1%減少した。鉱山稼働率は 85.3%から 80.1%に低下した。

地金生産の内訳は一次生産が 1.5%減少、二次生産は 12%増加した。二次生産はとくに中国のスクラップ供給の増加を背景に増加した。国別には中国が 7%、インドが 9%増加、SXEW 能力が増強されたメキシコは 10%増加した。しかしながら、チリは電解、EW 生産ともに減少し 12%減少した。日本は 4%、米国は 10%減少した。地域別にはアジアが 5%、ヨーロッパは 3%増加したが、アメリカは 10%、オセアニアは 6%減少、アフリカは横ばいであった。精製工場の稼働率は 86.0%から 85.8%へと横ばいであった。

消費は中国を除く世界合計がほぼ横ばいであったが、中国の見掛け消費の減少に相殺された。中国の見掛け消費(未報告在庫の増減を除外)は 4%減少した。国内生産が 7%増加したが、ネット輸入が 27%減少したことによる。その他の主要国ではインド、日本、米国が増加したが、ドイツは減少した。地域別にはアフリカが 3%、アジアは 2%減少(中国を除くアジアは 4%増加)、ヨーロッパは 4%減少、アメリカは 1%増加した。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

8/28	770	9/1	790	9/7	800	9/11	770	9/14	760	9/21	770
9/26	760	10/2	770								

### 2. 銅地金生産・出荷・生産者在庫(2017年8月分=平成29年8月分)

生産	: 129,700t	(前月比 5.1%減、前年比 3.9%減)
出荷	: 118,300t	(前月比 10.4%減、前年比 5.5%減)
在庫	: 121,000t	(前月比 11.3%増、前年比 11.1%増)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

8月の生産は前年同月比3.9%減の129.7千tとなり2か月ぶりの減少となった。出荷は前月比10.4%減、前年比5.5%減の118.3千tでそれぞれ3か月ぶり、4か月連続の減少。内訳は、内販が前月比15.9%減、前年比6.1%増の71.6千tで前年比は13か月連続の増加。輸出は前月比0.5%減、前年比19.1%減の46.7千tでそれぞれ2か月連続と4か月連続の減少。内販のうち電線向けは前年比6.6%増の43.8千tと2か月連続の増加。伸銅品向けは6.2%増の23.9千tで15か月連続の増加。在庫は前月比11.3%増、前年比11.1%増の121.0千tでそれぞれ2か月連続と3か月連続の増加となった。

### 3. 需要部門別動向

日本電線工業会によれば、2017年(平成29年)8月の銅電線出荷は前月比6.3%減、前年同月比0.4%増の53.5千t(推定)と6か月連続の前年比増となった。うち内需は前年比0.4%増の52.2千tと6か月連続の増加、輸出は2.2%増の1.3千tで再び増。内需の部門別では、自動車が16か月連続、建設電販は4か月連続、電気機械は2か月ぶりの増加となった。一方、電力は12か月、通信とその他内需は2か月連続の減少となった。

日本伸銅協会によれば、2017年(平成29年)8月の伸銅品生産は前月比15.2%減、前年同月比0.3%減の60.1千t(速報)と前年比は13か月ぶりの減少となった。うち内需向けは前年比0.3%減の50.0千tで13か月ぶり、輸出は0.4%減の10.1千tで10か月ぶりの減少。品種別では、半導体、コネクタ、自動車端子向けの銅条が16か月連続、自動車端子向けの黄銅条は8か月連続、コネクタ向けの青銅板条は2か月ぶりに増加したが、エアコン向けの銅管は6か月ぶりに減少した。

### 4. 2017年(平成29年)度銅電線及び伸銅品需要改定見通し

日本電線工業会によれば、2017年(平成29年)度の伸銅品需要(出荷量ベース)は前年度比1.7%増の692.0千tと予想される。前回予想(3月)の695千tから僅かに

下方修正された。内訳は内需が1.6%増の674千t、輸出は7.1%増の18千t。内需の部門別には、通信は固定系通信の減少、移動系通信の伸びの鈍化により9.9%減少する。電力は再生可能エネルギー関連需要や設備更新投資により微増。電気機械は民間設備投資や個人投資の増加により2.3%増加する。内訳は重電が2.8%、家電は5.7%、電子通信は2.9%、電装品は1.9%増加する。自動車は生産台数の減少により微減となる。建設電販は東京五輪、首都圏大型案件向け需要が下期に立ち上がり1.6%増加する。その他内需は民間設備投資の回復により6.3%増加する。

日本伸銅協会によれば、2017年(平成29年)度の伸銅品需要(生産量ベース)は前年度比4.3%増の827.0千tと予想される。前回予想(3月)の800千tから上方修正され、2010年(平成22年)度以来の高水準となる。内訳は、内需向けが4.0%増の684.2千t、輸出向けは5.5%増の142.8千t。主要品種別予想は、銅条が車載用端子向け、半導体リードフレーム向けともに好調で5.4%増の267.7千t。銅管はエアコン向けが安定推移し1.5%増の113.2千t。黄銅条は銅条同様、車載用端子向けが好調を持続し4.3%増の103.6千t。青銅板条はスマートフォン向けの好調持続により6.5%増の34.6千t。

平成29年度銅電線需要改訂見通し(出荷ベース)

平成29年9月  
単位:1000t

	平成27年度 実績	平成28年度実績			28/27 (%)	平成29年度見通し			29/28 (%)
		上期	下期	計		上期	下期	計	
通信	11.3	5.2	5.9	11.1	▲ 1.8	5.0	5.0	10.0	▲ 9.9
電力	59.6	27.9	26.7	54.6	▲ 8.4	26.0	29.0	55.0	0.7
電気機械	149.7	73.1	76.4	149.5	▲ 0.1	76.0	77.0	153.0	2.3
自動車	70.2	35.6	38.9	74.5	6.1	38.0	36.0	74.0	▲ 0.7
建設電販	338.1	155.6	165.3	320.9	▲ 5.1	156.0	170.0	326.0	1.6
その他内需	48.5	25.6	27.1	52.7	8.7	28.0	28.0	56.0	6.3
内需計	677.3	322.8	340.6	663.4	▲ 2.1	329.0	345.0	674.0	1.6
輸出	21.9	8.5	8.3	16.8	▲ 23.3	10.0	8.0	18.0	7.1
合計	699.2	331.3	348.9	680.2	▲ 2.7	339.0	353.0	692.0	1.7

(注)四捨五入による不突合あり

(出典)日本電線工業会

	平成27年度 実績	平成28年度実績			28/27 (%)	平成29年度見通し			29/28 (%)	
		上期	下期	合計		上期	下期	合計		
銅	板条	247.6	131.7	138.6	270.3	9.2	142.4	141.3	283.7	5.0
	管	108.4	55.7	55.8	111.5	2.9	58.5	54.7	113.2	1.5
	棒	30.8	14.1	13.5	27.6	▲10.4	14.9	14.6	29.5	6.9
	線	3.2	1.5	1.6	3.1	▲3.1	1.5	1.6	3.1	0.0
	計	390.0	203.0	209.5	412.5	5.8	217.3	212.2	429.5	4.1
黄銅	板条	102.7	53.3	53.4	106.7	3.9	55.9	55.1	111.0	4.0
	管	9.1	4.0	3.7	7.7	▲15.4	3.5	4.1	7.6	▲1.3
	棒	179.5	92.3	96.9	189.2	5.4	98.7	99.2	197.9	4.6
	線	30.2	15.3	14.9	30.2	0.0	15.2	15.1	30.3	0.3
	計	321.5	164.9	168.9	333.8	3.8	173.3	173.5	346.8	3.9
青銅	板条	33.0	16.0	16.5	32.5	▲1.5	17.2	17.4	34.6	6.5
	棒線	3.8	1.9	2.0	3.9	2.6	2.2	2.2	4.4	12.8
	計	36.8	17.9	18.5	36.4	▲1.1	19.4	19.6	39.0	7.1
洋白他	12.1	5.1	5.5	10.6	▲12.4	5.9	5.9	11.8	11.3	
合	内需計	633.3	325.3	332.4	657.8	3.9	343.3	333.2	684.2	4.0
	輸出	127.0	65.6	69.8	135.3	6.5	72.5	78.0	142.8	5.5
計	合計	760.3	390.9	402.2	793.1	4.3	415.8	411.2	827.0	4.3

(注)四捨五入による不具合あり  
(出典)日本伸銅協会

## 鉛

## 【海外】

2017年9月のLME鉛相場は前半の\$2,300/t台から後半は亜鉛相場の急伸につれて動意づき月末にかけて2011年9月以来となる\$2,500台に乗せた。

経済環境については、米国経済は米連邦準備制度理事会(FRB)が20日、金融危機開始後の量的緩和政策を完全に終結し、4.5兆ドルまで膨らんだ保有資産の縮小を10月から開始することを決定した。26日にはイエレン議長が12月利上げの可能性を示唆した。さらに、28日に発表された第2四半期GDP成長率の確定値は前期比3.1%/年と改定値3.0%から上方修正された。こうした背景下、ドルは対ユーロで月初の\$1.20水準から月末にかけて\$1.17台へとドル高基調を辿った。

中国経済は1~8月の銅輸入が前年同期比12.7%減、1~8月の固定資産投資は1~7月に比べ鈍化、8月の工業生産も2016年12月以来の低水準など投資家心理を失望させる指標が相次いだ。

供給障害要因としては、エルドラドゴールドは9月11日、子会社ヘラスゴールド(ギリシャ)のオリンピア、ストラトニ鉛亜鉛鉱山の操業とスコリエス銅鉱山プロジェクトの投資を9月22日に停止すると発表した。ギリシャ政府との環境許可をめぐる協議が行き詰ったことが理由。しかし、9月13日、オリンピア鉱山の操業許可、コッキノラッカス堆積場の改修工事の許可を取得したと発表した。

中国四川省の亜鉛鉱石生産は鉱山の環境査察の影響で最大で6千t減少する可能性がある。環境査察は8月7日に開始され、省内の鉛亜鉛鉱山の60%以上が操

業を停止した。査察ではテイリングその他の鉱山廃棄物の処理実態、堆積場や処理施設の有無、汚染水や大気汚染物質の処理方法などが検査されている。一部の鉱山は9月中に操業を再開したが、多くは国慶節連休(10月2～8日)以降の再開となる見通し。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2017年1～7月の世界の鉛鉱石生産は前年同期比10.1%増の3,000千t、地金生産は7.6%増の6,922千t、消費は10.0%増の7,031千t、地金需給バランスは前年同期の+42千tから▲109千tへと供給不足に転じた。

鉱石生産はアジアが21.7%、ヨーロッパは3.8%、アフリカは1.7%増加、アメリカは横ばい、オセアニアは24.9%減少した。地金生産はアジアが9.3%、アメリカは9.7%、ヨーロッパは1.1%、アフリカは12.3%増加、オセアニアは9.2%減少した。消費はアジアが11.5%、アメリカは12.2%、ヨーロッパは7.3%増加、アフリカは3.3%、オセアニアは18.2%減少した。7月末の地金の報告在庫は前年同月比2.8%減の505千t、在庫/消費比率は2.5週間から2.1週間に低下した。

中国は鉱石生産が18.7%増の1,609千t、鉛精鉱輸入は4.8%減の398千t、地金生産は10.3%増の2,953千t、地金の輸出入は12千tのネット輸出から59千tのネット輸入に転じた。この結果、見掛け消費(生産+輸入-輸出±上海取引所在庫)は13.7%増の2,988千tとなった。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

8/1 314      8/8 320      9/8 312      9/25 337      10/2 343

9月はLME鉛相場が\$2,300/tから\$2,400水準へ緩やかな上昇基調を示したことから、鉛建値は337千円/tまで価格水準を切り上げた。

### 2. 鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2017年8月分=平成29年8月分)

生産 : 17,173t (前月比 1.9%減、前年比 0.0%減)

出荷 : 14,595t (前月比 15.8%減、前年比 11.5%減)

在庫 : 10,861t (前月比 33.0%増、前年比 57.8%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

8月の生産は前月比、前年同月比とも減。出荷は夏期休暇の影響を受けて、蓄電池向け販売が減少したことで、前月比、前年同月比とも減。前年同月比は8か月ぶりの減。在庫は前月比増だが、前年同月比は23か月連続の減。

### 3. 需要部門動向

8月の自動車生産台数は前年同月比5.6%増の695,761台となり、10か月連続で



前年同月を上回った。乗用車は前年同月比 10 か月連続でプラス、トラックも同 4 か月ぶりのプラスだが、バスは同 4 か月連続のマイナス。

8月の自動車輸出台数は前年同月比9.9%増の359,536台となり、2か月ぶりに前年同月を上回った。

一方、8月の二輪車生産台数は前年同月比26.9%増の40,364台と11か月連続で前年同月を上回った。

(一社)電池工業会の調査によると、7月の自動車用鉛蓄電池のメーカー販売個数は、新車用、補修用、輸出用を併せた総合計で1,969千個(前年同月比3%増)と9か月連続で増加したが、自動車用以外の鉛蓄電池は613千個(同4%減)と6か月ぶりに低下した。その結果、鉛蓄電池の出荷はトータルで2,582千個(同1%増)と10か月連続で増加した。

#### 鉛関連製品生産統計

		7月	8月(速報値)
自動車	数量(台)	818,253	695,761
	前年同月比(%)	101.4	105.6
		6月	7月
自動車用鉛蓄電池	数量(鉛量t)	17,178	17,247
	前年同月比(%)	105.0	112.4

(出所:(一社)日本自動車工業会, 経済産業省生産動態統計調査)

#### 亜鉛

#### 【海外】

2017年9月のLME亜鉛相場は月初の\$3,100/t台からその後月中を通じて\$3,100圏で堅調に推移した。月末には2007年8月以来となる\$3,200台に乗せた。

その背景として、LMEニューオリンズ倉庫の亜鉛在庫が大量に中国に出荷されている。LME在庫合計の大半を占めるニューオリンズ倉庫在庫は世界的な需給タイト化を背景に減少傾向を辿ってきたが、8月半ばにLME/上海のアービトラージウィンドウが開いたことから中国向け出荷が加速された。また、直/先スプレッドもタイトな状態が続いており、9月中旬以降はバックワーデーションに転じている。

経済環境については、米国経済は米連邦準備制度理事会(FRB)が20日、金融危機開始後の量的緩和政策を完全に終結し、4.5兆ドルまで膨らんだ保有資産の縮小を10月から開始することを決定した。26日にはイエレン議長が12月利上げの可能性を示唆した。さらに、28日に発表された第2四半期GDP成長率の確定値は前

期比 3.1%/年と改定値 3.0%から上方修正された。こうした背景下、ドルは対ユーロで月初の\$1.20 水準から月末にかけて\$1.17 台へとドル高基調を辿った。

中国経済は1～8月の銅輸入が前年同期比 12.7%減、1～8月の固定資産投資は1～7月に比べ鈍化、8月の工業生産も2016年12月以来の低水準など投資家心理を失望させる指標が相次いだ。

供給障害要因としては、エルドラドゴールドは9月11日、子会社ヘラスゴールド（ギリシャ）のオリンピア、ストラトニ鉛亜鉛鉱山の操業とスコリエス銅鉱山プロジェクトの投資を9月22日に停止すると発表した。ギリシャ政府との環境許可をめぐる協議が行き詰ったことが理由。しかし、9月13日、オリンピア鉱山の操業許可、コッキノラッカス堆積場の改修工事の許可を取得したと発表した。

中国四川省の亜鉛鉱石生産は鉱山の環境査察の影響で最大で6千t減少する可能性がある。環境査察は8月7日に開始され、省内の鉛亜鉛鉱山の60%以上が操業を停止した。査察ではテイリングその他の鉱山廃棄物の処理実態、堆積場や処理施設の有無、汚染水や大気汚染物質の処理方法などが検査されている。一部の鉱山は9月中に操業を再開したが、多くは国慶節連休（10月2～8日）以降の再開となる見通し。

需給状況については、国際鉛亜鉛研究会によれば、2017年1～7月の世界の亜鉛鉱石生産は前年同期比 4.7%増の7,539千t、地金生産は6,744千t、消費は8,077千tでともに横ばい、地金需給バランスは前年同期の▲214千tから▲227千tへと供給不足で推移している。

鉱石生産はアジアが7.0%、アメリカは1.3%、ヨーロッパは3.9%、アフリカは23.5%増加、オセアニアは4.1%減少した。地金生産はアジアが横ばい、ヨーロッパは3.0%、オセアニアは2.2%、アフリカは8.6%増加、アメリカは4.5%減少した。消費はアメリカが7.6%、アフリカは13.4%、オセアニアは23.1%増加したが、ヨーロッパ、アジアは横ばいであった。7月末の地金の報告在庫は前年同月比 21.4%減の1,134千t、在庫/消費比率は5.4週間から4.4週間に低下した。

中国は鉱石生産が2,888千tで横ばい、亜鉛精鉱輸入は29.2%増の619千t、地金生産は2.5%減の3,462千t、地金のネット輸入は19.9%減の237千t。この結果、見掛け消費（生産＋輸入－輸出±上海取引所在庫/国家備蓄）は1.8%減の3,773千tとなった。

## 【国内】

### 1. 建値推移(千円/t)

8/1	355	8/7	358	8/10	373	8/17	388	8/28	385	9/1	394
9/7	385	9/15	379	9/21	409						

9月はLME 亜鉛相場が概ね\$3,100/t水準で推移したことから、亜鉛建値も堅調に

推移した。9月下旬には409千円/tと2007年(平成19年)10月以来ほぼ10年ぶりの高値を記録した。

## 2. 亜鉛地金生産・出荷・生産者在庫(2017年8月分=平成29年8月分)

生産 : 36,815t (前月比 3.7%減、前年比 0.6%減)

出荷 : 44,666t (前月比 0.4%増、前年比 3.4%増)

在庫 : 57,268t (前月比 10.4%減、前年比 25.4%減)

(生産の出典は経産省生産動態統計調査、出荷・在庫は日本鉱業協会受払)

8月の生産は前月比、前年同月比とも減。安中製錬所の長期定修から、前月、前年同月のレベルに届かず。出荷はめっき鋼板の販売が底堅かったことと輸出が堅調だったことから3か月連続の前月比増となり、前年同月比も2か月連続の増となった。在庫は出荷増から3か月連続の前月比減、前年同月比も7か月連続の減。在庫レベルは2013年(平成25年)12月の50,100t以来3年8か月ぶりの低水準となった。

## 3. 需要部門動向

8月の鉱工業生産指数は前月比2.1%増、前年同月比5.4%増の103.6(季節調整済、2010年=100基準、速報値、以下同じ)となった。前月比は2か月ぶりの上昇、前年同月比は10か月連続の上昇となった。好調な輸出がけん引して自動車や半導体関連の生産が伸びたほか、クレーンや半導体製造装置など、国内の設備投資向けも好調だった。経産省は「生産は持ち直しの動き」とし、2016年11月から続く基調判断を据え置いた。

8月の生産指数は15業種のうち11業種が前月を上回った。汎用・生産用・業務用機械工業、輸送機械工業や電子部品・デバイス工業等が前月を上回ったが、化学工業等は低下した。

8月の出荷指数は前月比1.8%増の101.8と2か月ぶりにプラス、前年同月比も5.8%増と10か月連続の増となった。

一方、在庫指数は前月比0.6%減の107.2と3か月連続で低下、在庫率指数も前月比4.3%減の108.4と2か月ぶりに低下した。

大企業の生産見通しを示す製造工業生産予測指数では、9月が前月比1.9%の低下、10月は同3.5%の上昇を見込んでいる。

7月の亜鉛めっき鋼板生産(次工程用消費を除く)は9か月ぶりに前年同月比マイナス。

7月の伸銅品生産量は70,853t(確報値、対前年同月比+7.9%)(対前月比▲2.7%)、2016年(平成28年)8月から12か月連続の対前年同月比プラス(5月+6.7%、6月+6.3%)。7月としては2011年(平成23年)(72,658t)以来の高水準となった。銅条・管・棒・線、黄銅条・棒、青銅棒線、洋白その他板条・棒線が対前年比

プラスとなった。銅条は15か月連続の対前年比プラス。銅管は5か月連続の対前年比プラス。黄銅棒は15か月連続の対前年比プラス。銅棒は2か月連続の対前年比プラスとなった。

内需向けは58,407t(速報値、以下同じ)、12か月連続の対前年比プラス(+7.2%)。輸出向けは12,138t、9か月連続の対前年比プラス(+8.2%)。

黄銅製品では、黄銅条が9,052t(対前年比+5.6%)、7か月連続のプラス(前年同月比、内需+2.9%、輸出+33.4%)。黄銅棒は16,118t、15か月連続の対前年比プラスとなった(対前年比+7.5%、前年同月比、内需+7.6%、輸出+3.8%)。

#### 亜鉛関連製品生産統計

		6月	7月
亜鉛めっき鋼板	数量(t)	871,688	849,603
	前年同月比(%)	106.7	96.1
黄銅製品	数量(t)	30,513	28,910
	前年同月比(%)	106.3	105.2
亜鉛ダイカスト	数量(t)	1,772	1,715
	前年同月比(%)	111.2	107.7
亜鉛華	数量(t)	4,877	6,081
	前年同月比(%)	93.3	105.2

(出所:経済産業省生産動態統計調査)